



ぼくらの山スタイル
激藪を突破せよ。

上信越国境稜線をつなぐ秋合宿

三国スキー場～セバトの頭～白砂山分岐～佐武流山～苗場山

写真と文・古川 歩 早稲田大学ワンダーフォーゲル部



- ①初日の藪漕ぎ。まだまだ藪に慣れない中を進む。
- ②笹平と呼ばれる場所。一面の笹は見ている分には綺麗だが進みづらい。
- ③三国スキー場跡で出発前の1枚。長い合宿に向け、気分が入る。
- ④佐武流山直前の笹漕ぎ。藪漕ぎ終了間近なので、力も湧き出る。
- ⑤2日目の稜線上では、時折、藪漕ぎとは思えぬ見晴らしの良い場所に出会う。
- ⑥苗場山の登山道上是楽勝ムード。これまでの道のりに思いを馳せる。

●「猛烈な藪、篤志家向き」
その言葉がやる気を起こす

早稲田大学ワンダーフォーゲル部は、縦走、沢登り、山スキー、ポート、自転車と非常に幅広い活動を行っている。3年生の秋から4年生の夏までが最上級生として代をとる期間となり、自分たちが考えた方針に則って合宿計画を立てることになる。この代では春と夏に北海道合宿を行い、そこから部全体のまとまりを作り上げることが目標としていた。

10月の秋合宿は、自分たちが代をとって初めてのものだった。だからこそ、この合宿にこだわりを入れたいと同期全員で考え、3パーティーで上越の国境稜線を繋ぐというコンセプトを立てた。その中で、自分の隊は藪にこだわろうと思った。私は、早大WV部に入学して4カ月、新人の夏合宿ではじめて藪漕ぎを経験した。日高山脈だった。その圧倒的なスケールと、厚く立ちちはだかる藪に魅了された。それ以来、新人の秋合宿で飯豊連峰の胎内尾根、2年生の秋合宿では尾瀬、と藪漕ぎ合宿に参加してきた。だからこそ、今回は自分の藪漕ぎ経験を集約させたものにしたと、考え、出てきたのが、三国峠から白砂山を経て、佐武流山へ向かうルートだった。エリアでは破線もなく、「猛烈な藪、篤志家向き」。その言葉にやる気を起こした。

●「灌木の中に迷いこむ」

三国スキー場所からムジナ平

10月21日 85リットルザックはそれなりの重さだ。6時過ぎに三国スキー場跡を出発。最初は登山道を快適に進み、登山道が東の御坂峠へと向かうところから、藪に入る。皆にサングラスと手袋をつけさせ、藪漕ぎ開始だ。最初は腰くらいまでの高さの笹藪で、ところどころに赤テープもある。だが、藪漕ぎならではの速度に慣れないのかトップの下級生は何度か読図ミスを犯す。それでも順調に距離を稼いでいく。

ぼくらの藪山術①

藪山計画の立て方と装備
手袋、サングラス
シンプルザック



サングラスと手袋は藪山行に必須。

私は、このときの合宿が長期縦走計画を立てた初めての機会であった。ただ、どういう計画にするか、どの場所に行くかは、話し合いによってはっきりしていた。基本的に、この部では、代をとる委員の希望を優先しつつ、話し合いで決めていく。

そこで、実現可能性を探るために、過去の記録を徹底的に漁った。インターネット上の記録や他大学の記録、山岳会の会報、山の雑誌などからである。特に、水場と幕営可能地、そして植生については深く調べて、ある程度確信を持って臨んだ。それでも、情報通りでないことはいくつもあったが、それはそれで楽しい。

また、装備についても藪漕ぎに合わせたものとした。普段、部ではマップケースを使用しているが、地形図をジップロックで防水してポケットに入れることにした。また、皮手袋とサングラスを藪から身を守るために着用させた。その他、装備の外付けは禁止し、すべてザックの中にしませた。また、団体装備としては浄水器を追加した。

やまある記●新人小山

私は藪漕ぎと縦走の違いをキットカットのスポーツドリンク味とジンジャーエール味の違いくらいに考えていた。しかし、実際にやってみるとその違いは南国バナナ味とローズ味ほどかけ離れたものだった。

やまある記●若林

藪漕ぎをしながら、20歳を迎えた。複雑な心境である。人生に一度しかない記念日は、藪の中にいた。まるで彷徨い生きる人生を暗示するかのようである。そもそも、生きる目的もなく成人する資格はないと思っていた。しかし、いまだなお目的はわからずに生きている。それではどう生きればいいたろう。



3日目。ハイマツと笹の植生の合間を進む。この部分が最も藪が薄いため、進みやすい。

しかし、1766ピーク手前の登りで苦戦する。だんだん灌木が増えて、進みにくくなり、いつの間にか赤テープもなくなくなる。完全に灌木帯の中に迷い込む形となる。しかも急傾斜である。新人には何となく疲れが見える。それでも声を張り上げて、氣勢を上げながら、木を潜り抜けて前へと進む。そうして灌木を抜け、再び笹藪へ。1766ピークからセバトの頭までは膝丈背丈くらいまでの笹藪が続く。登りと組み合わさり、疲れもあってなかなかきつ。今日最後の頑張り所だと力を振り絞り、トップを交代しながらセバトの頭へ。さらに時間があるので、水場のあるムジ

ナ平まで行く。
ムジナ平では、ずいぶん幕場を探して、何とか張れそうな場所を見つけた。ひどい幕場だと言ったが、実はこの幕場が藪中では最も良い幕場であった。上級生で南の沢へと水を汲みに行く。10分ほど沢に沿って下ったが、水の少ない時期だからか水量はわずか。結構時間をかけながら水を汲む。これから3日分の水なのでかなりの量だ。本日は隊員の20歳の誕生日。LとSからは差し入れが。本人も藪の中で20歳を迎えることには感慨深さがあるようだ。流星群が見える日なのだ。藪に遮られ空もあまり見えず、みな興味なし。



①ムジナ平へ。山の中では、秋の気配を色濃く感じた。
②2日目。上ノ間山への稜線が見える。この先、藪漕ぎが続くかと思うと、一瞬気が持たせそうになる。
③藪の終了点、佐武流山山頂。これまでの苦労のすべてが報われる最高の瞬間。
④活動1日目。1890m地点手前の笹藪で休憩中。先はまだまだ長い。
⑤初日の幕場。狭いようだが、合宿中では一番快適な場所だった。
⑥テント内で装備係による重量配分の計算。この決定が明日の苦楽を分ける。

●3日分の水を背負って、ひさびさの節水メニュー

△ジナ平から白砂山分岐

翌日、外は霧雨になっていて天気図からの判断とは少し異なるが、昼前には晴れると考えて出発。昨日のペースから今日は結構時間がかかるだろうと思ったのだが、予想以上に藪漕ぎ力が上がっていったためか順調に進む。急登や背の高い笹もあつたのだが、あっさり上ノ倉山着。こんな山頂でもちゃんとプレートがあることに感心する。上ノ倉山からは緩やかでプレートも目立つが、途中からは急な下りで尾根も細く若干ヒヤヒヤしながら行く。さらに忠次郎山までの登りも一気に上がる。この後は平坦なので楽勝だと思っていたが、意外と進まない。やっぱり皆疲れているようだ。膝から肩くらいの背の高い笹数とアップダウンがずっと続く。このくらいの藪にはもう慣れてるが、それでも徐々に体力を削られていく。何とか1982ピークまで到達。そこから、上ノ倉山まではそんなに距離がないように見えるが、尾根が細い上にギリギリまで藪が生えているので、歩きづら。だが根性一本で一気の上ノ倉山まで行ってしまう。この山の最後の登りも灌木で覆われ傾斜も急なので非常にきつい。新人には試練だが、上級生が声をかけると「元気で」と叫び返すので感心した。

上ノ倉山山頂は珍しく藪がほとんどなく、幕営もできそうな場所だ。お互いの頑張りも称え合う。しかし、幕営予定地まではまだ距離がある。天気図の時間に合うかギリギリだが予定地目指してさらに進む。ところどころ背の高い藪もあるが基本的にはそんなに濃くはない。皆疲れているがもう少しということでも士気は高く、15時40分に分岐に到着。

しかし、こちらにはテントを張れるスペースがほとんどない。何とか藪が薄いところにテントを張る。笹の上に張っている感じだ。夕食は棒ラーメンだが節水して作らせた。まったくスープがない食べ物となってしまった。それでも腹は減った。かと思え、少し先に行って幕場を探してもみたが、結局はここに張ることにする。ネマガリを押さえつけ、何度も曲げ、折り、細引きで縛って張る。それでも出来たのは非常に狭く地上から浮きあがったテントだった。何とか全員入ったが、6人用テントとは思えない窮屈さだった。

●笹藪はもはや楽勝

BPから佐武流山、さらに苗場へ

24日、今日で藪から脱出である。不安定なテントなので慎重に食事をすませ、6時12分出発。ネマガリに突っ込む。佐武流山までこれが続くのかと覚悟する。しかし、少し進むとネマガリは姿を消し普通の藪になる。その後もところどころネマガリが姿を見せたが、ほとんどは笹藪。これなら問題はない。昨日のうちに進んでおいた効果が出た。どんどん進んでいき、ついに藪を突き抜け佐武流山に到着。7時52分。とうとう長かった藪を突破した。佐武流山の山頂からはきれいに藪が刈り払われていて、曇り気味だが景色が良い。後は登山道なので天国状態でスムーズに進み、赤倉山に到着。今までの幕場とは違い、非常に快適である。翌日も登山道を降りるだけなので、あつという間だった。苗場山、神楽ヶ峰を過ぎれば終わりが近い。途中でハイキング客と大量にすれ違う。どこから来たのかと聞かれるが何とも答えづらい。和田小屋まで下山して、無事に5日間の合宿が終了した。

こうして、自分たちの秋合宿は無事に完結した。ここから、春はニセコでの山スキー、夏は日高と知床での沢登りと藪漕ぎの活動に向かって進んでいくことになる。この合宿は、その第一歩となるものだったため、その成功は自分にとっても大変自信になった。この藪漕ぎを乗り越えたことが、この後の雪山や夏の日高にも繋がったと思う。また、こうした形の山行は大学生でなければなかなか出来ないと感じていたので、その機会を活かせることも有難かった。

ているので文句を言わずに食べる。20時半就寝したが、20時頃にはみな寝ていた。

●ネマガリダケと戦い

白砂山分岐から赤樋山へBP

23日、5時起床。手早く撤収して出発。雲海がきれいに増えて気分は良い。分岐からすぐのところは藪が濃い。無理やり進んでいくと薄くなり、小さな池も出てくる。さらに進むと、笹中心だった藪がさらに太く背の高いものに変化してくる。これが噂に聞くネマガリダケだろう。この突破には大変苦労する。下りが続くあたりになると進むから腰くらいの笹になり、かなり滑りながら進む。1927の峰の先からも緊張を強いられる。落ち切り立っているのでもたもた緊張を強いられる。落ちたらやばい。2035の峰手前の登りも背の高い笹で結構濃い順調に通過し、幕営予定地へとどんどん進む。この先赤樋山まではところどころに登山道の跡のようなものがあり、藪もあまり濃くないので比較的楽である。

幕営予定地である赤樋山に到着したのは12時55分。一面笹で覆われた山頂である。パーティー全体が藪に慣れたのか非常に順調である。まだ時間もある。幕場をさらに先に延ばすことに決定。ここからは、北に行き過ぎると迷うとの情報があ

ぼくらの藪山術②

水と食料について 3日間で6.2リットルを背負う



△ジナ平から小さな沢へ水汲みへ。

この計画で苦労したのが、水についてだった。水を汲めるとはっきりしていたのは、藪中では△ジナ沢の1カ所のみであった。

私たちは、1日に必要な水の量を、それまでの藪漕ぎ山行での実例から、行動中に1.0ℓ、夕食・朝食用1.3ℓ、予備0.3ℓと見積もっていた。つまり1日2.6ℓであった。これを確保するため、初日の出発時には各自4ℓを持ち、また、△ジナ平を出発する際には3日分を持つ必要があったため、1人当たり6.2ℓを持った。なお、自分はその中でも天気の良い場合は節水に不安があったため、さらに2ℓの水を隠し持っていた。

また、食事も出来るだけ節水を心がける必要があった。そこで、朝食はフルーツグラノーラかミューズリー(シリアル的一种)に、粉ミルクをかけ、最低限の水で流しこむことにしていた。夜も棒ラーメンを主体として使うことにしていた。

以上のように、とにかく水には気を配って計画した。ただし、実際には天気が良くない日もあったため、あまり水に困ることはなかった。



全員が自分の役割を果たしたからこそ、合宿を成功させた。素晴らしいチームだった。

PROFILE

ふるかわ あゆむ
1988年生まれ。
早稲田大学社会科学部5年生。中学校でワンダーフォーゲル部に入部したことから、登山を始め、高校でも継続。大学入学とともに、早大WV部に入部し、主に沢登り、藪漕ぎ、山スキー活動を行う。印象深いのは日高、知床の沢。2009年秋より1年間、第61代主将を務めた。部を引退後、重人トマの風に入会。また、部のアシスタントコーチも務めている。



DATA 2009年秋合宿 夜行4泊5日

10/21	三国スキー場跡6:03-セバトの頭14:02-△ジナ平(C1)14:40
10/22	C1発5:50-上ノ倉山8:08-白砂山分岐(C2) 15:40
10/23	C2発6:15-赤樋山12:55-2107mピーク(C3) 15:10
10/24	C3発6:12-佐武流山7:52-赤倉山12:10-1970m地点(C4) 13:48
10/25	C4発6:12-苗場山7:10-神楽ヶ峰8:15-和田小屋9:55

2万5千円●三国峠、四万、苗場山、佐武流山、野反湖
アクセス●上越線後閑駅からタクシーで三国スキー場。帰路は和田小屋からタクシーで越後湯沢駅へ。
メンバー●L古川 歩、SL横塚崇弘、保延陽太、若林恵一朗、小山恭平

ぼくらの藪山術③

手も足も使い 泳ぐごとく 藪漕ぎのコツ



藪中での休憩。見晴らしはまったくない。しっかりレーションを摂って栄養補給。

藪漕ぎは雪山でのラッセルのようだとされる。しかし、トップが頑張るだけでは道ができないのが、ラッセルとの一番の違いである。つまり、各自が頑張らねばならず、後ろに下がってもあまり、休憩にならない。とはいえ、トップはやはり、一番疲れるので定期的に交代させる必要がある。そして、前の人を掻き分けた藪が戻ってくる前に次の人がしっかり支える。それを全員が繰り返せば後ろの人は比較的楽ができる。

また、藪漕ぎは泳ぐように行うと最初に言われた。水を掻くように、自分の前にある藪を掻き分けて進むのである。また、その際には、手だけでなく足も効果的に使うと良い。邪魔な藪は足で踏んでしまうのだ。これを続けると、地面から離れずと藪の上を伝って進むこともできる。

いろいろな書いたが、藪漕ぎではやはり体力とモチベーションが占める部分が多い。なので、普段のトレーニングと藪漕ぎへの熱意があれば、自然と前に進んでいくだろう。